

ハイステージ

1. ノルマ決定と勧誘序盤

ベーシックステージ・ミドルステージとやって、とうとう第3段階のハイステージまで来た。振り返ってみると最短コースだったりする。

ハイステージは日常の活動が主になる。最初・中間・最後の週末に全員参加で実習があるのと、全員の強制ではないが何回か行われるミーティングがある。その他の日常は参加者の自由行動だ。では、その日常で何をやるのか？というのは、最初の週末で明らかになる。場所はオフィスもあるビルのホール、トレーナー（進行役）は、ベーシックのときと同じS氏。

ハイステージでは一種の「ゲーム」をやるとのこと。それを「エンロールメントゲーム」という。エンロールとは、S氏曰く、「セミナーのすばらしさを紹介し、一人でも多くそれを体験してもらうこと」という。

「これをしなくてもハイステージは進められますが、得られるものが格段に違ってきます」とS氏。要するに「勧誘」なのだが、ベーシック、ミドルと体験した自分には、そういう言葉は浮かんでこなかった。自分がこんなにすばらしい体験をしたんだから他の人もわかってくれるはず、と思いこんでいた。ただ、エンロールにはルールがひとつあって、「セミナーの内容を話してはいけない」。これはちょっと厄介そう。

まず、このハイステージ期間（確か8/30まで）に自分が何か継続してやることを決める。僕は日記をつけることにした。そしてグループ分け、3〜4グループだったと思う。

そのあと「エンロール（勧誘してベーシックステージを受けさせる）」の人数を各々が考える。早い話がノルマだ。ただし仕事のノルマと違うのは、「自分で決めること」で、これは逃げ道を塞ぐことにもなる。人数が決まったら、みんなの前に立ってシェアする。僕は「4人」とした。

シェアすると、S氏が、「●●（ニックネーム）の人数が多いと思う人、ちょうどいいと思う人、少ないと思う人」とみんなに聞き、それに呼応して参加者およびアシスタントが手を挙げる。それを見て、もう一度席に戻って考える。そしてまた人数をシェア。僕の一回目は「少ない」と思う人が比較的多かったように見えたので、人数を6人にアップし、

シェアすると、「2001 年」が流れてきた。これが私のノルマ、しかも「自分で決めたノルマ」というわけだ。これを 20 人弱のメンバー全員がやり、それぞれがノルマを持つことになる。

ノルマを果たすことを「達成」という。全員のノルマの合計がこのハイステージ全体の目標となる。この「全員の合計」は個人のノルマよりも重要視され、全員の勧誘人数の合計がこれに達したときに「このハイステージとしての達成」となる。私のときは全体で八十数人だったと思う。

勧誘に成功することを「ON する」という。我々の場合、ほぼ 1 日につき 1 つの ON が必要な計算になる。

グループ分けもノルマも決まった。次は、グループごとにセミナーを讀える寸劇をする。1 時間くらいの猶予が与えられ、それぞれのグループがアイデアを絞る。

予定の時刻、S 氏が「せっかく皆さんがやる演技ですから、観客を呼びましょう。どうぞ！」と言うと、ホールの扉が開いてたくさんの人がなだれ込んできた。セミナーの卒業生たちだ。数十人はいる。

こんなたくさんの人の中でやるつもりではなかったので、ちょっとした緊張と照れを感じながら演技をする。終わったらグループごとに記念写真。要するに、今回のハイステージメンバーの「お披露目」というわけだ。

寸劇も無事終わり、これからみんながそれぞれの生活において「エンロール」をしていくのだが、ここで S 氏からひとつの提案があった。「72 時間ゲーム」。これからまる 3 日間、72 時間以内にどれだけの ON が取れるかというゲームだ。それが終わる 3 日後に同じ場所でミーティングを行うという。

私はすぐさまエンロールする相手の顔が浮かんだ。中学のときからの親友だった（ベーシックでキーマンにした友人とは別）。善は急げとばかりにホールと同じ会にあるオフィスの電話を借りて、友人にアポを取る。会う約束を取り付けて、「行ってきます！」と元気よく飛び出した。

近所のファミレスでその友人と会った。今思えば、彼は私のただならぬ様子を察知していたのではないかと思う。私の勧誘の言葉を一通り聞いたあと、彼ははっきりと拒絶してきた。そればかりか、私の方が説教されてしまった。彼には珍しく、かなり怒っているようだ。「目を覚ませ」と言いたかったのかも知れない。私はといえば、彼からのきついフ

フィードバック（セミナー用語で「面と向かって厳しいことを言う」こと）を聞いて、「これがハイステージの厳しさだ。この困難に耐えなければならない」などと思っていたのだから、完全に脳天気というか、セミナーの思うつぼだ。ミドルステージの「フィードバックの実習」は、これの訓練だったのかな、などと思ったりもした。

他のセミナーやメンバーの中には、〇〇時間ゲームという、寝る間も惜しんで勧誘する人もいるようだが、私はそれははじめから放棄して、睡眠はちゃんと取っていた。この点は賢明だったと思う。

結局3日間の間に、私は1つのONも取れなかった。

3日後のミーティング。遠方のメンバー以外はほとんど出席している。そこにあるものが持ち込まれた。全体の目標数の数だけある塗り絵だった。アシスタントが作ったという。

「この3日間でONできた人、ここに塗ってください。どうぞ!」とS氏が言うと、にぎやかなBGMが流れ、この3日間で勧誘に成功した人が塗り絵のマスを埋めていく。そしてシェア。それを見て、うらやましく感じると同時に屈辱に思った。自分も早くあちら側に立ちたい。

こうして私は、エンローラーとしての第一歩を踏み出したのだった。

2. 苦しみながらも勧誘に没頭

私のエンロールの日々は始まったばかりだ。とにかく、下手な鉄砲数撃ちや当たるではないが、いろいろな人に声をかけた。大学時代の友達や、会社の先輩や後輩……。でも結果はまったく伴わなかった。いつまで経ってもONゼロ。それをセミナー仲間では、0の数字の形と、「まだ出てこない」というのを引っかけて、「卵」と呼んだ。そう、私はいつまで経っても卵だった。

ある日、会社の後輩でもあるゼミの後輩を勧誘した。それからしばらくして、ゼミの先生と会った。当時私はとある学会の手伝いをしていたので、この日も仕事上の話をしたのだが、先生から開口一番、こういわれた。

「何か君が変な宗教に入っているという噂を聞くが」

自分の顔からスーッと血の気が引いていくのがわかった。尊敬する先生からこんなことを言われ、私は必死で動揺を隠しながら、「あれは宗教じゃないんです」と言うのが精一杯だった。今振り返っても、あれだけの動揺をしたことはあまりない。それにしても、そう言われて動揺するということは、自分の中に確固としたものがないのかな、などと思っていた。

またあるときは、会社の一年先輩を誘って飲むかたわら、エンロールをした。このときは、アシスタントにサポートをお願いしたりした。これも×。もう自分でどうやっていいのかわからなくなってきた。

今回のハイステージで、是非とも参加させたい人がいた。ベーシックステージでキーマンとした親友だ。しかし、何度話しても結果は同じ。おそらく自分に絶対の自信を持っている彼は、必要性を感じなかったのだろう。

今になって思えば彼は、顔を合わせれば勧誘話とわかっていながら、よく毎回私につきあってくれたと思う。この親友とは今も親交があるが、彼を失わなくて本当によかったと思うと同時に、友というのは何とありがたいことかと痛感する。持つべきものは友。

しかしこのときの私は、とにかくONが欲しくて欲しくてたまらなかった。仲間がONを出すたびに、おめでとうと祝福する。しかし常にその裏には、また先を越されてしまったという焦りがあった。

特に、ときおり開かれるミーティングの際、仲間が嬉しそうに塗り絵のマスを埋めていくのを見る屈辱は、耐え難いものがあった。自分も早くあっち側に立ちたい、そう思って来る日も来る日も学生時代の名簿を見てはアポイントを取ったりした。車を点検に出す際に、顔見知りのディーラーのセールスマンにまでエンロールをしたほどだ。それでも私は「卵の殻」を破ることはできなかった。

私はだんだん疲れてきた。本当に自分はONを出すことができるのか。ミーティングに行く足取りも重くなっていく。できることなら行きたくない。仲間はみんな励ましてくれる。でも彼らはほとんど、もうONに成功している。この焦りを何にぶつければいいのか、私はやるせなくなった。

自分の中にあった自信が、音を立てて崩れていく。私がこれまでしてきたことは間違っているのか？努力の方向が違うのではないか？自問自答しても答えは見つからない。とにかく今は動き続ける、それしかない。私は再び電話を取る・・・。

3. 地獄への大冒険

ONが出ない。来る日も来る日もアポを取って話をしているのに、一向にONが取れない。未だ卵状態のまま、ハイステージは中間地点にさしかかった。

今日は全員が集まって実習を行う日。この日遅刻してきた人がいた。ミドルでも出発を遅らせたNさんだ。ルールには「遅刻しないこと」というのがある。だから普通に考えたらこの時点で彼女は脱落なんだが、S氏は彼女を許すか許さないかの判断を、メンバーにゆだねるという。

「ミドルのときも遅刻したし、二度も許したらダメだ」と私は主張したが、大方の意見は「許す」。結局多数決でそうなった。なにかの実習の中で、「あなたは私を許してくれた」とか言っていたが、許してねえよオレは。

さて、ハイステージの実習の中でも、ことさら強烈に印象に残っているものがある。

「大冒険」と名付けられるこの実習は、企業研修でも採用しているところがあるだろう。駅前で歌うとかのあれだ。要するに、「人前で、変なことをやる」。

最初は、こんなことをやるなんて言われぬ。「大冒険という実習があります・・・やりますか？やる人は起立してください」とS氏。内容も知らせないで、やるもやらないもないだろうが。でもやらないわけにはいかないんだろうなあ・・・という感じで立った。周りを見ると、やっぱり全員立っている。

全員の起立を確認すると、S氏は「冒険のメニュー」を提示した。交通整理員、仏像の格好で動かない、高いところに上ってセミのまねをする・・・など。どれを選ぶかはメンバーの自由。私は「通行人を笑わせる」を選んだ。これならできそうだと。

現場に向かった。とあるデパート前の広場。ここでみんなそれぞれの「変なこと」を順番にやる。気の済むまでやったら、自分のグループのアシスタントに「完了です」と告げる。そこでOKを出すかどうかは、アシスタントの判断。

始まった。端から見ると、みんなよくそんなことできるなあ、という感じだ。どういう境地になったら、ああいう風になれるんだろう。

で、私の番。一口に笑わせると言っても、笑わせるどころか振り向いてもくれない。誰かに声をかけても無視されてしまう。恥ずかしい以前に、焦ってきた。

一組の男女カップルの前で、すっ転んで笑わせようとした。いざ転んだら、男性の方が僕につまづいてしまった。男性は、私をかなり敵意のこもった目で見つめた。私は「ごめんなさい」と謝ったが、まさに一触即発で危なかった。

もう嫌だ。こんなことはやりたくない。そんな一心でアシスタントに「完了です」と告

げた。アシスタントは「本当にいいの？」と聞き返してきた。早く解放されたい。「もういい」と首を縦に振った。

「じゃあいいです」とアシスタント。やっとのことで解放されたが、辛口のアシスタントからは、「あれじゃONは取れないと思った」と酷評され、他のメンバーからは『真剣』が『深刻』になっているようだよ」と言われた。この『真剣』が『深刻』になる」というのは、この後ずっと僕の心の中に引っかかり続ける。僕のエンロールはずっとそうだったのかも知れない。

ある日、私たちより前に始まったハイステージの「卒業式」があった。これは公開で行われる。このハイステージは、最近非常に稀だと言われる「達成しなかった」、つまりノルマが果たせなかったハイステージの卒業式だ。このハイステージでトレーナーを勤めたA氏は、「達成しなかったけど、大承認だ」と言った。しかし卒業式が終わったあと、前出の辛口アシスタントが僕に言った。「あれは『見せしめ』と思った方がいい」。達成しないとそんなふうに思われるんだ・・・。

4. セミナーに失望、ただ仲間のためだけに

中間点も過ぎ、これからは追い込みに入る。しかし自分はまだ「卵」のままだ。何とかしてONをとらなければならない。

会社の先輩で、ゼミの先輩でもある人にアポイントを取った。この人とは柏で会った。グループの女性アシスタントのサポート付きだ。その日は軽くジャブということで、セミナーの話はほとんどせずに飲んだ。

先輩はアシスタントを見て、「おまえもこういう女友達ができ安心したよ」と一言。ちょっと罪悪感にさいなまれる。先輩とはもう一度会う約束をした。

約束どおり再び先輩と会う。今度はアシスタントだけではなく、他の卒業生も応援に加わってもらった。周囲をがっちり固められて、先輩は明らかにとまどっていた。

今度は勝負とばかりにセミナーの話を持ちかける。先輩のとまどいはさらに大きい。どんな話をしたかは覚えていない。でも、衝撃的に覚えていることが一つある。

アシスタントが泣き出したのだ。「彼があんなに真剣に言っているのに、どうしてわかってあげないの・・・」。僕は、生まれてこの方、人のためにこんなふうに涙を流したことがない。それだけに彼女の涙は衝撃的だった。僕は一生この光景を忘れることはないだろう。

結局、先輩からもONを取ることはできなかった。

翌日、私に電話が来た。電話の主は、昨日先輩のエンロールにサポートとして出てくれた女性（泣き出したアシスタントとは別人）からだった。「あなた、本気でやっているのかなって思った」。教えて欲しい、どこからが本気というのか・・・。

このころから、エンロールしたくない私が確実に頭角を現してきた。ある暑い日、部屋で横になっていた。エンロールのために動かなければならないのは頭でわかっていた。しかし体が動かない。深層心理が、私の体を動けなくしていた。「もう嫌だ」そんなサインが頭から発せられるのがわかった。

私は、どうしてエンロールに成功していないか、もう一度考えてみた。

おそらくそれは、「過去の清算」ができていないからだろうという結論になった。つまり、ベーシックでの実習「一番辛かったこと」で採りあげなかった、自分でトラウマと思っている高校生活のシカト体験、これを誰にも話さず受け止めてもらっていないからだろうと思った。

ベーシックでのトレーナーでもあるS氏なら、それを聞いて受け止めてくれるだろう。
私はオフィスに向かった。

私は涙ながらにそのことを話した。しかし、S氏の反応は予想を裏切るものだった。不機嫌そうな顔をして、「もうハイステージやめるか？」と言い放った。

この時点で私は、セミナーに失望したと言っていい。一応、「生まれ変わる」とってはみたものの、もう自分の中の、セミナーに対する情熱は消えつつあった、それでも苦楽をともにした仲間だけは裏切れない。仲間のために、最後まで続けることだけはしようと思った。

5. 泣き落とし作戦と意外な形での勧誘成功

私は、ついに「どうしようもなくなったときに」とあえてエンロールしなかった身内に手を伸ばさざるを得なくなった。まず神奈川にいいところにエンロールした。いろいろと話したが、結局ダメだった。「トイレに行く」と言って席を立ち、個室で泣いた。この前のアシスタントも、こんな気持ちで泣いていたのだろうか。久しぶりに私が来たということで、おじさんおばさんが豪華な料理で歓待してくれて、なんだかものすごく申し訳ない気分になった。

次に父にエンロールした。父はこのようなセミナーに否定的な意見を持っているのだが、山は高い方がいい、と挑むことにした。

父はいつも晩酌を欠かさない。「今晚はお酒を飲まないで聞いてほしい」と明言したにもかかわらず、話をする前に少し飲んでいて、はっきり言って腹が立った。しかし今になって思えば、自分の息子がこんな状態になってしまい、しらふで聞くのは堪えがたかったのかも知れない。

父との話はやはり平行線だった。全然かみ合わなかった。僕も知りうる限りのボキャブラリーと論理を組み立て、誠心誠意話したつもりだが、ダメだった。

あきらめて打ちひしがれている私に、母が言った。

「私が出てあげる」

「…いいの？」

「あんたが一生懸命話をしているのを見て、私が受けてあげなきゃっていう気になった」

「…ありがとう…」

こうして私の最初のONは、意外な形で迎える形となった。

5. やっと終わった

僕がONした話を聞きつけると、メンバーから次々とお祝いの電話が来た。仲間ってありがたいなあ。でも、正直言ってすぐに実感は湧いてこなかった。意外な形のONだったからだろう。

しかし変化は確実に現れた。何よりも嬉しかったのは、ミーティングでようやく「塗る」側に立てたことだった。

このあと、私は卒業生のサポートを受けながらも、2つのONを取る。心境の変化は確実にあったようだ。しかしまだノルマの半分。あと3人残っている。全員の合計も達成にはギリギリのペースだ。

しかし私の頭の中は、「もういいよ、やめようよ」という自分がいた。前稿で触れた「エンロールしたくない自分」だ。この時期には、頭の中のかかなりの部分を占めるようになった。私は「6人」というノルマをあきらめるようになった。

最終日、つまり8月の最後の金曜日、私は仕事を終えて帰途についた。でも何かもやもやしたのを感じていた。自分はそのまま帰ってしまっているのだろうか、電車に乗って考えていた。そして逆向きの電車に乗り換えた。目指すはセミナーのオフィス。そこで今の状況を聞いた。

「実はもう達成している。でもみんな動いてるから、あなたもベストを尽くして」。

その言葉を聞いて、私は仲間には悪いが、自分の中の清算をすることにした。そう、あの「キーマン」の親友と話がしたかった。

私はもう、彼にエンロールはしなかった。ただ、心ゆくまで話したかった。彼もそんな私の気持ちをくんでくれたのか、はじめはファミレスで話していたのを、彼の自宅に場所を移してまで話につきあってくれた。

明け方、睡魔に勝てず彼が眠ったのを見て、私は彼の家を出た。ノルマには達しなかったものの、彼と一晚語り尽くせただけで満足だった。一度自宅に寄り、セミナーに向かった。

Nさんが来ない。ずっとエンロールに疑問を持ち続けていた彼女だが、やるからには最後まで出るべきだ。ましてや一度遅刻してみんなに許してもらっているんだから、なおさらだ。私は腹立たしかったと同時に「それ見たことか」と思った。

実習はあるにはあったが、何をやったか忘れてしまった。申し訳ない。

前にも話したとおり卒業式は公開で行われる。OB・OGが大挙押し掛け、何人もの卒業生と抱擁。

でも…、僕のところに来る人は少なめだったように記憶している。僕がノルマを達成できなかったからかな…。みんな僕を避けているのかな…。

そしてアシスタントからメンバーの紹介が行われる。意外にも私が一番先だった。彼女が言うには、「達成しなかったけど、いろんなことを学んだ人」。確かに、体験しなくていいものも学んでしまったのかも知れない……。

すべてが終わった。メンバー・アシスタントともに打ち上げに行き、二次会ではカラオケで朝まで歌い明かした。

このハイステージ、自分は何を学んだんだろうか。人の心？自分の心？

辛い日々であったことは間違いない。ベーシック・ミドルでの体験とは明らかに異質なものだ。でも辛いなりに「よくもまあ没入したものだ」と振り返って思う。

OBとなってから、何度かハイステージの卒業式に行った。抱擁のときに言う言葉は決まっている。

「やっと終わったね」

それは、私自身がハイステージを終えたときの素直な感想だったから。